

海の向こうにでて見れば

(6)「物乞う人」に…

石田 佳子

一概に「海外に住んでいる」と言っても、現地の人々に溶け込みなじんで暮らしている人だけではなく、日本人とばかり交流しながら暮らしている人、ほとんど誰とも交流せずに暮らしている人など、その暮らし方はさまざまです。とりわけ海外に住む日本人には、「日本人“村”社会」と揶揄されることがあるほど特有のコミュニティを形成する傾向があるため、今回は自分の経験約5年前、生まれて初めて東南アジアを訪れた私は、赤ん坊を抱いて路端に座り込む女性や、自らの障がい（欠けた手や足など）を誇示しながら金銭を求める男性の姿に衝撃を受け、「彼らはなぜここでこんなことをしているのだろうか？」「私は彼らに何ができるだろうか？」という疑問に捕らわれました。日本では彼らのような「物乞う人」を目の当たりにする機会が乏しかったため、驚きと困惑と憤りを感じたのです。彼らのいる風景を見慣れてしまった今になっても、それらの疑問は解けた訳でなく、答えを探して私の内で燻り続けているようです。そこで今回は、「物乞う人」と彼らを取り巻く状況について考えてみます。

「物乞う人」から「商う人」へ

私が住んでいるクアラルンプールの中心部では、ピカピカの高層ビルが乱立し、豪華なホテルや流行の飲食店、近代的な建築物、高架式のモノレールなどがひしめき合っています。マレーシアは凄まじい勢いで発展している国ですから、ここ数年間で街の様子が急激に変化しました。ポンコツ自動車や廃墟のような建物を見かける機会は減り、「物乞う人」と出会う場所も限られて来ています。

しかし、それでもやはり（中心部からほんの数分歩いただけで）雰囲気が一変し、打ち捨てられたような風景にとってかわる、寂れた地域もあるのです。そんな場所には無造作にゴミ屑が散らばり、微かな異臭が漂っています。薄汚れたビルの隙間や路上には、垢で全身を真っ黒に覆われたホームレスの男性が寝そべったり、様々な年代の「物乞う人」が座り込んだりしています。

オープンエアのフードコート（屋台が集まった所）で食事をしていると、金銭（喜捨）を求める人がやって来ます。あまり清潔そうに見えない服装をしていても、店主も客も目くじらを立てることなく、見過ごし容認しているせいか、彼らは臆することなく堂々と自己主張します。また、

毎週決まった場所で行われる地元のパサール・マラム（夜市）には、決まって彼らが現れます。彼らはまるで欠かせない参加者のように、違和感なくその場に溶け込んで見えるのです。賽銭箱と共にポケットティッシュを携えている人もいますが、金銭（喜捨）と引き換えにティッシュを持ち去る者はほとんど居ません。しかし、その代わりに彼らは音楽を奏でたり、唄を歌ったり、深々と頭を下げ、謝意を示したりするのです。



パサール・マラムの「物乞う人」たち（クアラルンプールにて）

もしかすると、誰かにマージンを支払っているのかもしれませんが、彼らの顔には「引け目」や「羞恥」といった暗さが見受けられず、「商う人」のような自信すら感じさせます。



音楽を奏でる「パフォーマー」たち（チェンマイとシムリアップにて）

考えてみれば、唄や音楽を提供してお金を得るのは「パフォーマー」ですし、物と引き換えにお金を稼ぐのは「商う人」の仕事です（実際には“形だけ”の場合もありますが）。彼らは「与える/与えられる」という一方的な関係でなく、「遣り取りする」という対等な関係を築こうと努力しているのかもしれませんが。

途上国の「命にかかわる貧困」

発展途上の貧しい国々では、先進国とは次元の異なる「貧困」が見受けられます。低所得、栄養不良、不健康、教育の欠如などのために人間らしい生活ができない程の貧困状態を「**絶対的貧困**」と呼んで、「1日1.90ドル以下で生活している人たちの数」で表します。

世界銀行によると、2013年時点でこのような状態にある人たちは、7億6660万人でした。世界の人口は約73億人ですから、地球人口の約1割（10人に1人）が、日々死を覚悟して生きなければならない程の「貧困」の中にいることになります。貧しい国で、貧しい親の元に生まれたために、教育も医療も受けられず、命の安全が脅かされる環境の中で、必死の努力をせざるを得ないとしたら……？衣食住にも事欠き、読み書きも計算もできないため良い仕事には就けず、一日一日をただ生きのびるための悪戦苦闘に明け暮れ続けるとしたら……？

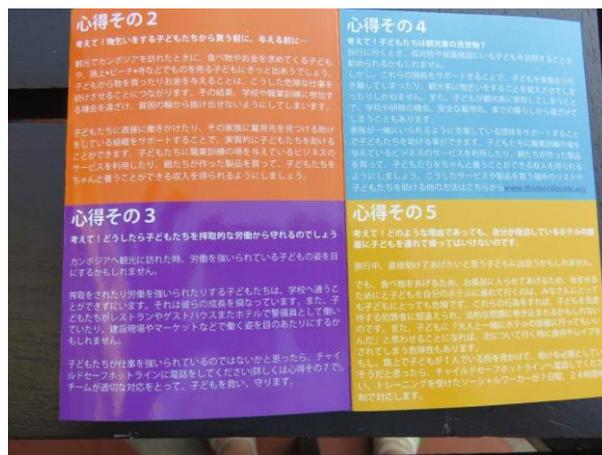
そのような状況では、生きるために切り捨てたり奪われたりするものが増えるでしょう。言うまでもなく、教育や医療や福祉などは容易く手に入りません。また、警察や法律がうまく機能していないため、親にわずかな前金を支払ってその子どもを買い取り強制労働や売春や臓器売買などに従事させる犯罪（人身売買）が、横行します。売られたり騙されたりして働かされる子ども達は、劣悪な環境の中に置かれ、暴力や折檻や栄養失調や不衛生による疾病（性病や感染症）などで死んでしまうことも少なくないそうです。

「人権」も「尊厳」もない世界

インドでは、マフィア（ごろつき）が「物乞う人」をモノのように管理しているという話も聞きます。路上で暮らしている子どもたちを連れて来て、その手足を切り落としたり、火傷を負わせたり、目をつぶしたりして物乞いをさせ、その上前を跳ねるのです。また、成人の「物乞う人」に赤ん坊を貸し出すビジネス（レンタルチャイルド）もあり、その赤ん坊の供給源として出産を強いられた女性たちがいるそうです。マフィアの目的は、「“顧客”の哀れみを掻き立ててより多くの小銭を出させること」ですから、そこには子どもや女性への配慮どころか、「人権」や「人間としての尊厳」といった概念さえ微塵もありません。

カンボジアには、今も戦争の傷痕が生々しく残っていて、地雷で手や足などを失った人たちの物乞う姿が、そこかしこに見られます。家族や友人を殺されたり殺したり、身体の一部を奪われたりといった地獄さながらの現実を通り抜けて来た人たちが、心の傷を癒して自立して行くのは並大抵のことではないでしょう。また、親を失い、幼い頃から路上で屑拾いや物乞いに従事した

り、ペドフィリア（小児性愛者）の餌食になっている子ども達には、明るい未来が思い描き難いでしょう。観光地のホテルやレストランには、観光客に向けて「子ども達は、見世物ではない！」との警告や、「個人にお金を与えるのではなく、団体に寄付しましょう」との啓蒙が、英語その他の言葉で書かれたリーフレットが置かれています。



子どもたちを守るためのリーフレット（カンボジアのシェムリアップにて）

迎え入れる雰囲気

途上国の政府やコミュニティには、福祉制度のようなセーフティネットを設ける余裕がありません。宗教施設や慈善団体が支援の手を差し伸べていますが、それだけでは到底足りないため、基本的にはすべてが「自己責任」で賄わねばならない世界です。怪我や病気や老いなどで働けなくなれば、一直線に「貧困」に向かって滑り落ちる他ないのです。それでも（それ故に？）「物乞う人」を排除するのではなく、迎え入れ認めようとする雰囲気が、少なくとも私の訪れた東南アジア諸国の「普通の人々」には感じられました。そしてこのような雰囲気は、日本をはじめとする先進国では、ほとんど感じたことのないものでした。

先進国の「わかりにくい貧困」

今の日本では、物乞いが法律（軽犯罪法、児童福祉法、市町村の条例など）で禁止されているため、彼らの姿を見かけることはほとんどありません。また、その他の先進国でも生活保護や医療保険などの社会保障制度を設けている国が多いので、働けなくなっても「命にかかわる貧困」に直行することはないでしょう。しかし、だからといって「貧困」がない訳ではありません。

OECDは「**相対的貧困**」という言葉で先進国の貧困層を定義しています。これは「等価可処分所得（世帯の可処分所得を世帯人数の平方根で割って算出）が全人口の中央値の半分未満の世帯員の割合」で、つまり一定基準の所得を下回っている人の多さを示します。日本の相対的貧困率は、総務省「全国消費実態調査」（2009年）では10.1%、厚生労働省「国民生活基礎調査」（2012年）では16.1%と上昇して（増えて）いて、平成21年度の所得の中央値は250万円なので、年収125万円（月収は約10.4万円）以下で生活している人が貧困と見なされ、これに該当する日本の貧困層は全国民の約16%（6人に1人）です。

親が貧困に陥ることで問題になるのは、「子どもの貧困」であり「貧困の世代間連鎖」でしょう。親の所得が低いためにその子どもが十分な教育を受けられず、生涯安定した仕事に就けないとしたら……？人は努力した成果が認められたり、達成感を味わえた時に、喜びや満足を得て『また明日も頑張ろう！』と思えるものでしょう。しかし、頑張っても事態が一向に改善せず、将来に何の希望も見出せずにいたら……？頑張りがたくてもその対象（仕事や活動の場）が与えられず、所属集団（会社や家族や社会）から弾き出されてしまったら……？

冷ややかな眼差し

ストレスにまみれて疲れ果てた時、心の隙間にアルコールやドラッグや借金といった「悪い習慣」が入り込むのは、容易いことのように思われます。しかし、それらの悪習にはまることは、水面に浮かび上がろうともがいている人の手足を縛ることに等しく、彼らをより過酷な状況へ追いやるのです。暴力や売春や犯罪（加害/被害の両方の可能性を含む）に手を染めたり、より

一層困窮した状態や自暴自棄や自滅といった方へ向かわせる、潤滑油や陥穽になることが多いのです。

私の印象では、日本やアメリカ、カナダや欧米などの先進国で「貧困」は、“個人の問題（他人ごと）”や“自己責任（自業自得）”として片付けられ、見過ごされがちのように思います。競争や効率を重視する資本主義、個人主義の世界では、「物乞う人」にも厳しく冷ややかな眼差しが注がれがちなのです。そのような蔑みの視線や、大半の人が豊かに暮らしている中で「自分だけが貧しさに苛まれる」「希望も成すすべもない」という状況は、彼らに深刻なダメージを与えてエネルギーを奪う、残酷な足枷になるに違いありません。

自力ではどうにもならない悪循環にはまり込み、社会の底辺に転がり堕ちてしまったら、どうしたら良いのか？何ができるのか？……せめて「自分にも起こり得ること」として、今後も考え続けたいと思っています。